

文学分野

---

ユーラシア古語文献の  
文献学的研究

---

研究班代表

吉田 和彦

## はじめに

吉田 和彦

今日のグローバル化時代のなかで、ユーラシア古語文献の研究はめざましい発展を遂げており、10数年前とは根本的に異なる状況にある。研究を著しく促進させた要因としてまずあげられるのは、それまで旧ソビエト連邦をはじめとして特定の研究機関が所蔵していた文献資料が一般に公開されるようになってきたことがある。さらに、かつて単独では調査が困難であった地域における国際的な連繋によって、新出資料がユーラシア大陸の各地から発掘されてきたことがあげられる。本研究会の目的は、このような新出資料を含めたユーラシア古語テキストを対象にして、文献学的研究を進めることにある。研究班は地域的にみれば、a) 中央アジア、b) 西アジア、c) インド・チベット、d) 中国、e) 日本・朝鮮、f) ロシア・東欧、g) 小アジア、h) 西欧に分けられ、また分野的には文学、歴史学、宗教学、言語学などといった領域が含まれるが、地域と分野を横断するかたちで研究が進められている。

今回の報告書に提出する4つの論文は、ユーラシアのさまざまな地域で記録された古語文献を対象にした言語学的研究である。吉田論文は、インド・ヨーロッパ系の言語で書かれた6つの古文獻（ホメロス、リグ・ヴェーダ、古リトアニア語、古期アイルランド語、トカラ語B、リュキア語）にみられる問題を比較文法の立場から分析することによって、共通祖語からそれぞれの言語が成立するまでの先史の復元を試みている。佐藤論文は、12世紀初めにキエフにおいて当時のロシア語で書かれた年代記『過ぎし年月の物語』を取り上げている。そしてこの年代記のなかで聖書が引用されるとき、作者は基本的には聖書本文を極めて正確に引用しつつも、読み手に訴えかけるという表現上の必要に応じて、かなりの程度自由に本文を改変していたことを主張する。檜崎論文は、古典シリア語旧約聖書のテキストを扱っている。古典シリア語は後期アラム語のひとつであり、紀元後1世紀から13世紀に記録された資料を

伝えているが、本論文ではそのうち旧約聖書テキストを対象にして、倫理与格の出現条件を明らかにしようとしたものである。森論文は、古代メソポタミアにおいて楔形文字で刻まれたシュメール粘土板にみられる動詞複数語基の意味機能について考察したものである。シュメール語は、他の楔形文字で書かれたどの言語とも関係づけられない、系統的に孤立した言語である。もとより話し手は残っていないし、檜崎論文で扱われている古典シリア語テキストのように同じ内容が他言語で書かれているということもない。このような死語にみられる文法形式の機能を探るには、テキストから問題となる形式をすべて収集、整理したうえで、個々の例が現われるコンテキストを考慮しながら、确实と言えるものをひとつひとつ積み上げていくよりほかはない。

これらの4つの論文は、それぞれの対象とする言語ばかりでなく、取り上げられた問題やその問題に対するアプローチの方法も異なっている。しかしながら、明らかな共通点がある。それは、文献を丹念に読み解こうとする姿勢である。現代語と違って、話し手の存在しない古語文献の場合、精緻な読解なしにはその正確な理解に近づくことができないからである。